

アイヌ語の 1 を示す数詞*

切替英雄



2011年6月4日

この論文は『言語研究』第129号 日本言語学会 2006年3月 pp.227-242 にこのタイトルで掲載されたものに多少の加筆をしたものであるが、そもそもは、「アイヌ語のもう一つの1」と題して、日本言語学会大会の研究発表用として準備していた。2度応募した。しかし、いずれも採用されなかった。その後、原稿を「北海道民族学会および日本文化人類学会北海道地区平成16年度第1回研究会」（北海道大学 2004年6月27日）で読み、翌年『北海道民族学会会報』（創刊号 2005年7月）に掲載していただいた。『言語研究』に投稿するにあたり、大幅な加筆訂正をほどこした。その際、京都大学の吉田和彦氏より、特に論文末尾の箇所を中心に有益な助言を賜った。さらに、日本言語学会第140回大会の公開シンポジウム「数の言語学」（筑波大学 2010年6月20日）でほぼ同じ内容でお話した。初めのアイデアは、1974年夏、アイヌ語を学び初めの頃、最初に読んだ知里真志保先生の『アイヌ語入門』『地名アイヌ語小辞典』から生まれた。一つの考えが具体的な実を結ぶまでにはずいぶん時間がかかるものである。今後とも研究は深められなければならない。

本論中用いた例文は、参考文献としてあげたアイヌ口承文学のテキストから得た。テキストのほとんどは叙事詩であるので、行 metrical line の区切りをスラッシュで示した。そのほかに、砂沢クラ氏 (1897-1990)、沢井トメノ氏 (1906-2006) という二名のインフォーマントから直接得られたものもある。

言語学会大会用の原稿の執筆にあたり、2008年2月13日に死んだ妻真智子が内容につき強い関心を示し、深く読み、適切な意見を述べてくれた。亡妻が読んでくれた最後の論文になった。

1 目的

人類はどんな過程を経て数 1 を発見したか——これが私の関心であり、1 の発見に至る過程の一つがたまたまアイヌ語の研究からあぶり出せる、というのが私の主張である。

人類が数の体系に 1 を組み入れるようになったのは、言いかえれば、1 が数であることを発見したのはいつのことであろうか。そしてそれはどのような過程を経てなされたのであろうか。このような問題の立て方は奇異であろうか。数 0 の発見ということを考えてみよう。「なし」とか「ただ」とか「空^{くう}」とか「無^む」とか言っているうちはまだ 0 が数の体系に組み入れられたことにはならない。まず、ある定まった音形あるいは文字ないし図形が「なし」「ただ」「空」「無」などの語句で意図され示され了解されてきた観念に常に対応するようになることが必要である。しかし、それだけでは 0 が数の体系に組み入れられた、と言うには不十分である。その観念とそれを指示する音形ないし図形（数字）が自然数の系列の一つの要素を示すものとして意識されるようになることが必要である。それとまったく同様に、1 もまた発見される必要があった。0 については単源説が流布している（ただしマヤ文明を築いた人々は 0 を独自に発見したらしい。Ore, Oystein 1976: 18-19）。1 については多くの民族がそれぞれに発見したように見える。アイヌ語を研究すると、人類の 1 の発見に至る一つの過程が見えてくる。数の系列の幾何学的表象ともいえる数直線は相当後代の発明であったろうが、その上に散らばる実数を人類は次々と、しかし長い年月をかけて少しずつ見いだしていった。すなわち、(0 を除いた) 自然数、0、分数（小数）、負数、無理数、さらに ∞ 。1 の発見はその歴史の一コマであったと考えられる。

ここでは記数法については述べない。取り扱うのは「呼数法」である。

いろいろな言語の数詞にみられる算術的構造の多様さは、個々の数詞の体系が文化により異なる過程を経て成立したことを示している（たとえばアイ

ヌ語がそうであるけれど、50 が wán-pe e-ré hot、すなわち $20 \times 3 - 10$ として示されるようなとき、 $20 \times 3 - 10$ を数詞 50 の算術的構造と呼ぶことにする)。

そうした過程の一つとして、1 を示す数詞が 2 の概念から生まれるということがありえたのではなかろうか (その場合 1 を示す数詞の算術的構造は $2 \times \frac{1}{2}$ 、すなわち 2 の半分ということになる)。アイヌ語がその例だといえるのではないか。そのような仮説を立てて、アイヌ語の 1 を示す、今まで触れられることの少なかったもう一つの数詞の成立を跡づけることにした。

2 基本数詞

アイヌ語には次の基本数詞がある。

1	siné	6	iwán	20	hót
2	tu	7	árwan		
3	re	8	tupésan		
4	íne	9	sinépesan		
5	asíkne	10	wán		

以下のことが注意される。

- tu「2」と re「3」は後接語 (前倚辞 proclitic)*¹である (例: setá「犬」、tu séta「2 匹の犬」。tu séta ではアクセントが一つ前に移動して、全体であたかも一つ単語のような体裁になっている)。
- 口承文芸 (主に韻文) では、tu ... re ... 「多くの～」 「おびただしい～」 という形式が頻繁に現れる。

(1) *tu ai uturu / re ai uturu / eshikiru* 二つの矢の間 | 三つの矢の間 | を轉身し (霰のように降り注ぐ矢をかわす情景) (金成、金田一)

*¹ 単語と接頭辞の間にある不完全な自立性しか持たない形式。

1959: 242)

- *ine* が例外的なアクセントを示す (アクセントが第一音節にある)。
- *tupésan* 「8」と *sinépesan* 「9」 はそれぞれ *tu* 「2」と *siné* 「1」を内部に含む。
- *hót* 「20」が名詞であるのを除いてほかはすべて連体詞である (*tu setá* 「2匹の犬」に対して *hót ne setá* 「20匹の犬」。*hót* は名詞であるから繫辞の *né* をとり連体修飾句をなす)。

これらの基本数詞は、細部に異同はあるものの知られているすべてのアイヌ語方言に共通するから (服部 1964: 260-267)、Proto-Ainu にはすでに出そろっていたと考えるのが適当である。ところが、さらに遡って個々の数詞の由来 (いわゆる語原) を解明しようという人々がいる。

たとえば、1を示す数連体詞 *siné* (*siné seta* 「1匹の犬」) が二次的に発生した、という説がある。それはほんの仮説にすぎないが、金田一京助、知里真志保が説いたものである。金田一 (1935/1993: 103-104) は指折り数えるときの指の名 (*shi mompet* 「親指」) と関連づけて、*si* が「大」「真」の *shi* に由来し、*ne* は名詞を形容詞化する語尾であると説く。名詞を形容詞化する語尾とは、上で述べた繫辞の *né* (*hót ne setá* 「20匹の犬」) のことである。知里 (1936/1974: 57) は *shi* には「本」「真」「自身」などの意味があるとしている。*si* の用例としては次のような複合語をあげることができる。

- (2) *si-annoski* 「真夜中」、*si-apekes* 「大きな燃えさし」、*si-pase* 「真に尊い〜」、*si-kiru* 「〜が身を翻す」←*kiru* 「〜が〜を回す」など (*si* が接頭した以上の派生語は切替 (2003) より)。

siné の二次的発生説の致命的ともいえる欠陥は「真の〜」という意味で用いられている *siné* の例 (いわば強調の *siné* の例) を金田一、知里ともに示すことができなかつたということにある。金田一 (1935/1993: 104) 自身がそれを認めている。それゆえ、知里が、いわば強調の *si* 「本」「真」のほか

に再帰接頭辞の si-(kiru) 「自身」(self) をあげているのは興味深い。si は si-annoski 「真夜中」、si-apekesh 「大きな燃えさし」では連体詞的であり、si-pase 「真に尊い～」では副詞的である。一方 si-kiru 「～が身を翻す」では、再帰的な名詞項として二項動詞に接合している(「～が自身を回す」)。

さて、知里があるいは考えていたかもしれぬことに従い、siné の si を繋辞 ne に対する再帰的な名詞項とみることはできないだろうか。si-ne 「それ自体であるところの～」が「1」を意味するに至ったと考えることは決して不合理ではないと思う。とはいえ、この想定も、「それ自体であるところの～」という意味を示す siné の明白な例は見つかっていないから、まだ弱い仮説である。ただし、sine utar 「同じ親族」、sine itak 「同じ言葉」、sine rorumpe 「同じいくさ」などのような、siné を「同じ」と訳しうる句がそんな例に近いと言えるかもしれない。

- (3) *shine rorumpe*/tumunchi 同じいくさ: ukoeramno / *shine rorumpe* / *shine* tumunchi /aueutanne / ki a korka 相共に | ひとつ戦ひに | ひとついくさに | 互に味方となり | たりしが、(金田一 1931: 670. 同じ戦をともに戦う情景)

- (4) *shine hosari* 同じ振り向き inne hekattar / *shine* hosari /uko-e-yukar / i-nukar rokpe 大勢の子供たちは | 一斉に私の方を | 向いて | 私を見たが(久保寺 1977: 249) *shine* hosari uko-e-yukar 「同じ振り向きを皆してまねる」

また、ことさら再帰と関係づけずとも、「真の～」(強調)という意味と 1 の概念に深い関わりがあることは後に述べる。

とはいえ算術的構造が疑いなく明らかなのは tupesan 「8」(10 - 2) と sinepesan 「9」(10 - 1) だけであり、そのほかの基本数詞は、siné も含めて算術的構造はおろか構成要素の抽出さえ満足にできない。siné についてだけではなく、他の数詞にも確かにこれまでにいろいろな試み(いわゆる語原

説)があった。しかしここではそれに触れない。いずれにせよ、基本数詞の分析からえられるこのような仮説は Proto-Ainu 以前の Pre-Ainu に関わることである。

また、これも Pre-Ainu の段階についての推察であるが、tu「2」と re「3」が proclitic であり、かつ算術的構造を内部に含んでいそうにないことから、この二つの基本数詞が相当古くからアイヌ語に存在していたことは、ほぼ確実と思われる。

本稿で考察されるのも、近代になってテキスト化された口承文芸の分析に基づくとはいえ、やはり Pre-Ainu に関わることである。アイヌ語には同系統の言語が発見されていないから、Pre-Ainu のこととして想定される事柄に対して確実な証拠をあげるのは不可能である。従って、そのような想定は金田一、知里説と同様、ほんの仮説にすぎない。しかし、まず、主に胆振地方の方言による口承文芸のテキストを調べ、従来あまり取り上げられなかった 1 を示すもう一つの形式を見てみよう。その上で、1 を示す二つの形式の並立することの意味を考えたい。

3 1 を意味する ár

田村すず子(1996: 20)の『アイヌ語沙流方言辞典』には、次のように接頭辞 ar- の二つの意味が紹介されている(沙流は日高地方西部、沙流川流域の名。なお、Dettmer(1989: 791-794)の *Ainu-Grammatik* では ar- に関する諸家の記述が整理され示されていて、参照に便利である)。

(限られた決まった語に接頭して)一つの…

(一つのを二つに分けた)一方の / 片割れの…

-suy 振り (=回数単位); *arsuy* 一回。

kewtumu (彼の)心; *arkewtumu* (彼の)心の半分 / 片方。 *arkewtumu*

wen *arkewtumu* *pirka* 片一方の心は悪い片一方の心は良い。

→oar, ear

ár が 1 を示す例として、十勝地方本別に行われていた方言に次のような単語がある。

- (5) *ár-ukuran* 「一晩」(tu *úukuran* 「二晩」、re *úukuran* 「三晩」。沢井トメノ 1906-2006)

このような例は日高・胆振地方に伝承された口承文芸にいくつか見いだすことができる。

- (6) *ar inau-kike* 一本の削り掛け: *ar inau-kike* / *a-rekuchi-kote* 一本の削り掛けを | 私の頸に付けてくれた (久保寺 1977: 129)
- (7) *ar pakesh* 一杯の盃: *Epontureshi* / *oripak-an koroka* / *ouse ar pakesh* / *akore rusui*. お身の小さい妹に | 失礼なれど | たったひと盃を | さしあげたい (金成、金田一 1959: 104)
- (8) *at-tam* 「一刀」: *Shirarbetunkur* / *chi attamnere* / *aekarkar* シララベツ彦が | 唯一刀に切ら | れた (金成、金田一 1965: 196)

佐藤知己 (1995: 42) が世に紹介した『蝦夷言いろは引』(弘化 5 年、1848 年?) には「一盞 (イッサン)」に対して *sine tuki* と *ar-tuki* の二つの形があげられ、「一腰」に対して *sine emus* と *ar-emus* の二つの形があげられている。tuki 「盃」、emus 「刀」。それぞれシ子トキ、アリトキ、シ子エムシ、アリエムシと書かれている。

なお田村があげていた *ár-suy* 「一回」が *siné* とともに不特定な時を表す句に用いられることがあることも記しておかなくてはならない。

- (9) *arasuianita* あるとき (金田一 1923: 172) ← *ar-suy an ita*

これは、これよりはるかに頻繁に現れる次の句とほぼ同じ意味を持つもの
であろう。

(10) *shineanita* とある日 (金田一 1923: 92) ← *sine an i ta*

従来の数詞に関する研究で、*ár-suy* 「一回」については、予想される **siné suy* ではない特異な形であることから、しばしば触れられるけれど (村崎 1979: 91、Tamura 2000: 258-259 など)、先に引用した「限られた決まった語に接頭して」(田村 1996: 20) という陳述以外には 1 を示す *ár* についての一般的な記述は見られない。しかし *ár* が *siné* とともに 1 を示していたことは疑いがないと思われる。ただし次節で述べるように *ár-suy* の *ár* を 1 を示す例とするのは不適切ではないかと私は考えている。

4 「二つ一組の片方」「半分」を意味する *ár*

前の節で『アイヌ語沙流方言辞典』から引用して *ár* に「(一つのものを二つに分けた) 一方の / 片割れの…」つまり「二つ一組の片方」「半分」の意味があることに触れた。この意味の *ár* の存在は早くから気づかれていた。知里 (1956/1984: 7) によれば次のような複合語があるという。なお、*ár* の末尾の子音は弾き音 *r* (日本語のラ行の子音に類似する) が音節末に現れたものであって、後続する子音が歯茎音・口蓋音のときそれに同化ないし異化することによっていくつかの異なる形で実現される。

(11) *an-nan* 半顔、*an-rur* 山向こうの浜辺の地 (太平洋沿岸の日高地方からみた、日本海沿岸の後志^{しりべし}・石狩地方を指す。*rur* 「潮」「海」)、*at-tek* 片手、*at-chake* 対岸、*ár-un-kotan* あの世

さらに例を集めると：

- (12) *ar-moisam* 入り江の向こう側の浜: *armoisam ta / payean yakne*
向こう側の浜に | 行くと (金成、金田一 1963: 41)
- (13) *at-tap* 片一方の肩: *attap kashi / shikush rayochi / attap kashi /*
ekai rayochi / chieomare 片肩の上には | 日光の虹が | 片肩の上には
| 半輪の虹が | あって (金成、金田一 1961: 65-66. 鎧の装飾を叙す)
- (14) *ás-sik* 片目: *Né áy ani pón yupi sikihi tukán. Ássiki isám.* その矢
で小さい兄の目ねらうって、片目なくした (砂沢クラ 1897-1990。
遺稿より。原文はカタカナ書き。日本語訳も砂沢クラによる。石狩地
方旭川方言)

以上の複合語は、いずれもいわば自然的なペアをなすものの片方を意味している。

次の *ár* も「二つ一組の片方」の意味と理解すべきであろう。

- (15) *ár-enko* 「半分」(十勝地方本別方言。日高地方沙流方言では
aremko(ho) という形で存在する。田村 1996: 21): *Árenko kuóyra,*
árenko kuésikarun. 半分忘れたが、半分覚えている (沢井トメノ)

enko は宗谷・樺太方言の *énko(kehe)* 「半分」、また、ほかの方言の *émko* 「半分」と関係があるだろう (服部 1964: 223, 267)。そこで、*ár-enko* は「半分 (に分けたもの) の片方」と解釈できる。

また田村が『アイヌ語沙流方言辞典』で 1 の例としてあげていた

- (16) *ar-suy* 「一回」(*ás-suy* 沢井トメノ。またほとんどの方言でも。服部
1964: 265)

を *tu súy* 「二回」、*re súy* 「三回」と比べると、*ár* は 1 を意味しているとしか思えないし、また前節でみたように *sine an i ta* 「とある日」と並んで *ar-suy an i ta* 「あるとき」のような例もあり、ますますその感を強めるのだ

が、この回数の単位 *suy* を副詞 *suy* 「また」「再び」(17) と関連付ければ、*ár-suy* は「再びの片方」、「再びの半分」を意味していたと推定できる。

- (17) *Shineanto ta / sui hotke-an wa / an-an awa*, ある日のこと | またわたしが寝て | いたところが、(金成、金田一 1959: 332)

tu súy、*re súy* はそれぞれ「二つの再び」「三つの再び」ということになる。したがって *ár-suy* を *ár* の 1 を示す例としてよいかは微妙である。すくなくとも語源的には「二つ一組の片方」であったと考えられる。同辞典では *suy* が「振り (=回数の単位)」とされている。おそらくこの *suy* を他動詞 *suyé/súypa* 「揺する、振る」(単数・複数) と関係付けたものと思われるが、*suy* 「振り」という語根の存在を示唆する例はこの他動詞の単複のペアのほかにはみられないし、「振り」と「回」は意味からいっても直ちには関連づけられないと思う。

次の例でも *ár* は「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味で用いられている。

- (18) *at-tem* 両手を広げた幅の半分 (*sine tem* 両手を広げた幅。「一間」「一尋」。*tem* は長さの単位 (“**Attem**, n. Half the distance one can attain by stretching the arms out.” Batchelor 1938: 61、鷹部屋福平 1941: 129-130)。本来は「腕」の意味。*tem-nikor* 「腕の輪 (のちに入れる = 抱く)」砂沢クラ (遺稿)。*tu tem* 「二間」、*re tem* 「三間」(切替 2003: 400)

自然的なペアをなさないもの、対称的な二つの部分に分割できないものにも *ár* が用いられることがある。それは前の節で見たところである。そのような例では、*ár* は純粋に 1 を意味するものとなっていると考えられる。

ところで、*ár* が 1 の意味で用いられているのか、「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味で用いられているのか、あいまいになることがある。我々は久保寺逸彦 (1992: 271) とともに、次の例を見出す。

(19) *At-tem pakno / tu-tem pakno / arpa-an ko* 一間ほど | 二間ほど |
われ行きては (金田一 1931: 795)

したがって

siné tem, tu tém, re tém, ...

の系列と並んで

át-tem, tu tém, re tém, ...

の系列が存在したと推定される。この *át-tem* は「半間」「半尋」ではなくて「一間」「一尋」と解せられる。

そのようなわけで、*ár* は 1 を示そうにも「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味と受け取られかねない場合、またその逆の場合もあったことが知られる。

ここで、金田一、知里説を再び取り上げるなら、*ár* の両義性の解消への欲求があって、*siné* 「真の～」あるいは「それ自体であるところの～」が *ár* の 1 を意味する領域に進出したと考えることができるかもしれない。*siné* が 1 を示すようになる以前、もっぱら *ár* が 1 を示していたのではないか、という可能性である。もしそれが正しいのなら、1 の意味を担う *ár* が新興の *siné* に駆逐されつつあることが現代に残された口承文芸のテキストに見られるということになる。また、各方言の日常語においては、少数の例外*2を除き、ほぼ完全に駆逐されたときれよう。しかし先に見たように、*siné* が「それ自体であるところの～」を意味したとする証拠は、「同じ～」と解釈されうる用例がその反映であるとしても、それを除けば、「真の～」という意味同様、これとってないのであるから、これは弱い仮説と言うほかない。

*2 私が知るのは、先に述べた十勝方言の *ár-ukuran* 「一晚」のみ。

5 強調の機能をもつ ár

ár はある種の強調を示すためにも用いられる。これは ár の第三の用法である（先にも触れたように siné にはこの用例——「真の～」を意味する siné の例——は全く見られない）。

(20) *ar hekachi* まったくの子供、*ar teinep* まったくの赤ん坊： *ar hekachi* / *ar teinep* / *korachi ankuru* まるで子供 | まるで赤ん坊の | 如くなる人（金成、金田一 1959: 198）

(21) *ar herepash* はるかな沖へ： *ar herepash* / *atui tomotuye* / *paye-an aine* 遥かなる沖合へ | 海原を横切り | 行き行きて（久保寺 1977: 454）

(22) *ar shinen* たった一人： *Tane anakne Okikirmui ar shinen newa tush ani*. （仲間たちが倒れ）今やオキキリムイはたった一人になって（鉾の）綱を握った。（知里真志保 遺稿: 44. 日本語訳は切替。shinen 「一人」は shine (= siné 「1」) の名詞形）

1 あるいは「二つ一組の片方」の概念と、強調の機能との間にはなんらかの心理的な連絡があったことは疑いえない。これは金田一・知里説に都合のいい事実となる。

6 ár から派生した二つの単語 eár、oár

次に『アイヌ語沙流方言辞典』で示されていた ár の二つの派生語 eár と oár を見ておきたい。

ár に機能がまだよく分かっていない接頭辞 e- がついた eár は、「ただ1つの」という 1 を強調した意味で用いられる。eár が「二つ一組の片方」の

意味を示す例、および純粋な強調の機能だけを示す例は見つからない。

- (23) *ear ay* ただ一本の矢 : *ear ay ari / sine ikin ne / upokor humpe / ci sirkocotca* 私はただ一本の矢で | 一度に | 親子の鯨を | 仕留めた (切替 2003: 177. *sine ikin ne* 「一度に」については後に述べる。)
- (24) *ear kik* ただ一撃 : *ear kik ne / araike ruwe ne* 私は彼をただ一撃で | 殺した (金田一 1931: 578)
- (25) *ear kabarbe* ただ一枚の薄衣 : *ami kosonte / ayaikoante / ear kabarbe / ayaikonoye*. 我が着る小袖 | 我脱いで | たゞ一枚の薄物を | 我身にまとう。(金成、金田一 1966: 306.)

次の「全く」を意味する副詞 *ear-ikin-ne* は Batchelor の辞典にあるものだが、文字どおりの意味は「ただ一列になって」であるから (*ikin*←*ikir* 列)、1 の概念と強調の機能とが近い関係にあることがよく示されている。とは言っても、これは *ear* の「ただ一つ」の例であって、単なる強調の例ではない。強調はこの形式全体が持つ機能である。

- (26) *ear-ikin-ne adv.* Thoroughly. Well. Entirely. Quite. (Batchelor 1938: 100)

これは次のように用いられる。

- (27) *ekoikian a yakka / earikinne / eepokpaan wa / ikiani ka / someone ruwene*. 我汝を打ったけれど | 全く | 我汝を憎んで | やったことでも | ないのだ。(金成、金田一 1966: 340)

ear-ikin-ne に対して *sine ikin ne* には「完全に」などの意味はなく、「一度に」「同時に」という意味で用いられる。先の例文 (23) にそれが示されている。

ar に機能がよく分からない接頭辞 *o-* がついた *oar* は、「二つ一組の片方」

の意味か、強調の機能かどちらかを示す。oár が 1 の概念を示す用例は見当たらない。

まず「二つ一組の片方」の例から。

- (28) *oar arkehe* 片一方の端 : *oar arkehe* / *oterke ko* / *oar arkehe* / *hotari* 片一方の端を | 踏むと | 片一方の端が | 上がる (切替 2003: 152。火に当たってゆがんだ炬ぶち木の様子。árkehe は ár の自立形だから oár árkehe は「片一方の片一方」ということである。片一方には二つある。その片一方ということ。この「片一方の片一方」という解釈はアリュート語学の大島稔氏が初めに気づかれたものである。)
- (29) *oat cikiri* 片足 : *oat cikiri* / *otuimaasi* / *oat cikiri* / *ohankeasi* 片足を | 遠くに立て | 片足を | 近くに立てる (切替 2003: 64。飛ぶ鳥を狙って弓を引く情景。)

次のものは強調の機能を示す例である。

- (30) *oar teinep* まったくの赤ん坊 : *eani oar teinep ene* / *pon yarpepo ane wa* お身は全くの赤子であったし | 私は幼い女児であって (金成、金田一 1964: 83)
- (31) *oar apa-eaikap* まったくみつからない : *Newa tapne* / *pon awenyupi* / *huraha at* / *apkor humash ko* / *oar apa-eaikap* / *ruwe-an*。どこからか | 若いわたしの兄さん | の匂いがある | ような気がしたが | 全くわたし発見できない | ことだよ、まあ! (金成、金田一 1963: 220)

以上見てきた eár、oár の意味・機能を ár と対比してまとめると次の表のようになる (参考に siné も加えてみた)。

	二つ一組の片方	1	強調
ár	○	○	○
eár	×	○	×
oár	○	×	○
siné	×	○	×

この表から eár と oár が相補的であることが明らかになる。ただし eár が単純な 1 の概念ではなく、強調された 1 の概念を示すことは上で見た。また ár の機能負担量がなかなか重いこともわかる。

7 1 の概念が 2 の概念より後に成立したという見解

ドイツ青年文法学派の Brugmann(1940: 363) は、印欧諸語における 1 を示す単語に二つの祖形 *oi-no-s と *sem- をたてて、次のように述べている。

Zu dem abstrakten Begriff ‘eins’ kam man von verschiedenen sinnlichen Vorstellungen aus.

訳 「一」という抽象的な概念は、二つのあい異なる具象的な観念から生まれた。

*oi-no-s の示す「一」の概念は、beide「両方の」、alle drei「三つごとの」など対立する gerade der「まさにその」、nur der「ただその」という表現 (Ausdruck) から生じたとされている。また、*sem- の語源的な意味は zusammen「一緒に、集まって」とされている (Brugmann 1940: 363-364)。ここでは、印欧祖語において二つの形式が並立していたことの意味、および 1 を示す数詞と 2、3 などを示す数詞が成立した時系列的前後関係が暗示されるにとどまっている。

泉井久之助 (1978: 189-192) は、印欧諸語において 1 から 10 にいたる数詞のうち一致が乱れるのは 1 であって、ある印欧語の 1 は *sem- にさか

のぼり、別の印欧語の 1 は *ei(no)- にさかのぼるということを述べている (*oi- と *ei- は同じ形態素の交替形)。英語では *sem- は same として現れ、*ei(no)- は one ないし冠詞の an として現れる。さらに泉井は *sem- は「一つにまとめる、集める」という意味を、*ei(no)- は「いくつかのなかから特に一つを抜き出して示す」という意味を持つものだと推定している。前者についてはドイツ語の sammeln などを、後者についてはラテン語の ūn-icus を引き当てている。泉井は次のように述べ、より踏み込んだ認識を示している (泉井 1978: 191)。

この事実 (数詞 1 に対して *sem- と *ei(no)- の二つの祖形が立てられるということ—切替) は一つの原印欧語域の内部において、<2> 以上の数詞は各方言域を通じて、すでに共通の表現要素が一貫して行われていたのに対し、<1> の数詞についてだけは、その表現要素の定立に、なお選択の余地があったことを示している。^{*3}

また、「純粋に数詞を必要としたのは「二」からである」(泉井 1978: 192) とも述べている。

我々は、ものを数えるということを当たり前の行為だと思っている。しかし、何にせよ数を唱えながら指折り数えた幼児期を思い起こせば、数えるということが決して a priori なものでもなければ、自然に習得されるものでもない、なかなか高度な技術を要する行為であることに気づく。その行為を数理哲学のラッセル (Russell 2002: 16-17) は次のように規定している。

The act of counting consists in establishing a one-one correlation between the set of objects counted and the natural numbers (exc-

*3 本稿の論旨には関わりのないことであるが、泉井のこの論述は背理である。「原印欧語」のような祖語 proto-language は同系の諸語 (印欧諸語) を比較して再建されるもので、遡って一点に収束するものであるから、その祖語に方言を認めるとするのは、原理的に矛盾することになる。祖語において *sem- と *ei(no)- の両形があって揺れていた、ということまでが言い得ることである。

cluding 0) that are used up in the process.

訳 数えるという行為は、数えられるものの集合と、その過程で使い切る (0 を除いた) 自然数との間に 1 対 1 の相互関係を打ち立てることにある。

ものを数えるためには、その支えとしての数詞の体系が成立しているか否かはともかく、1 から始まる (0 を除いた) 自然数の系列が概念として成立していなければならないというのであろう。確かに我々は、1 から始めて 1 を繰り返し加えれば、数詞の限界を超えてあらゆる自然数にたどり着けることを知っている。この自然数の系列も我々は当たり前のことと思っている。しかしラッセルは言う (Russell 2002: 2-3)。

To the average educated person of the present day, the obvious starting-point of mathematics would be the series of whole numbers,

$$1, 2, 3, 4, \dots \text{etc.}$$

Probably only a person with some mathematical knowledge would think of beginning with 0 instead of with 1, but we will presume this degree of knowledge; we will take as our starting point the series:

$$0, 1, 2, 3, \dots n, n + 1, \dots$$

and it is this series that we shall mean when we speak of the “series of natural numbers.”

It is only at a high stage of civilisation that we could take this series as our starting-point. It must have required many ages to discover that a brace of pheasants and a couple of days were both instances of the number 2: the degree of abstraction involved is

far from easy. And the discovery that 1 is a number must have been difficult. As for 0, it is a very recent addition; the Greeks and Romans had no such digit.

訳 現代の平均的な教育を受けた人にとって数学の明らかな出発点は次の整数の系列であろう。

$$1, 2, 3, 4, \dots \text{etc.}$$

おそらくある程度の数学的知識のある人だけがそれが1からではなく0から始まると考える。だがこの程度の知識は前提としよう。次の系列を議論の出発点としたい。

$$0, 1, 2, 3, \dots n, n + 1, \dots$$

「自然数の系列」というとき意味されるのは、この系列である。

この系列を議論の出発点とすることができるようになったのは文明がようやく高い段階に達してからのことである。雉のつがいと二日とがどちらも数2の例であることが発見されるまでには長い年月を要したに違いない。ここで必要とされる抽象化の程度はおよそ容易なものとはいいがたい。まして1が数であるという発見は困難であったに違いない。0にいたっては、ずっと最近になって加えられたものである。ギリシャ人やローマ人はそんな数字は持っていなかった。

ラッセルは、「まして1が数であるという発見は困難であったに違いない」と断定しているが、その根拠は述べていない。また、先に引用したように、数えるという行為が1から始まる(0を除いた)自然数の系列の成立していることを前提にしているならば、2の概念があって1の概念のない文化では数えるという行為が成り立たないことになる。数えるという行為が成り立たないのに、2の概念が存在するというのはどういうことであろうか。説明不足だと思う。そうした欠陥はあるものの、ラッセルの説は有史以前のことを

念頭に置いた魅力的な説である。(0を除いた)自然数の系列がまだ成立する前に、つまり一般に数える技術が成立する前に、2などの概念が1より先に成立しえたというふうにこの説を理解すべきと思う。

このラッセルの説とあるいは関係があるかもしれないが、1が数でないということを心理分析学のユンクが述べている。ユンクはそう考える理由を3の象徴性について述べた論文の中で、Macrobius という中世の哲学者を典拠としつついくらか具体的に説明している (Jung 1953: 118)。1が2から生じたという考えもここにみられる。

The number one claims an exceptional position, one is not a number at all; the first number is two. Two is the first number because, with it, separation and multiplication begin, which alone make counting possible. (Jung 1953: 118)

訳 数1は例外的な地位を要求するものである。(中略)1は数では全然ない。最初の数は2である。2とともに分割と増大が始まるからである。分割と増大だけがものを数えることを可能にする。

これを河合隼雄 (1977: 101) は次のように敷衍している。

二の象徴性について、ユンクは中世の哲学者の考えを援用しながら、人間にとって最初の数は一ではなくてむしろ二ではないかと述べている。つまり一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく、何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ、そこに対立、あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ「一」の概念も生じてくると考えられる。

これらの説がもし正しいのなら、つまり、1の概念が2の概念の成立を待って生まれたというのが正しいのなら、árの1と「二つ一組の片方」という二つの意味に新旧の順番をつけることができるのではなからうか。つまり、árはもともと「二つ一組の片方」を意味し、ブルークマンの言葉を使え

ば、「具象的な観念」を表していたが、後に純粋な数 1 をも示すようになったと言えるのではなからうか。冒頭で、数詞 1 は 2 の概念から生まれることがありうると述べたが、それはこのことを指している。知里の仮説を受け入れたうえで想像すれば、1 を示すようになった ár の多義性を解消するため、「それ自体であるところの～」を意味していた siné が（「同じ～」という意味の siné がその反映であるとみなす）、それはまた「真の～」という意味であったかもしれないが（ただしその証拠は全くない）、1 を示すようになり、1 を示す ár は、これもまた「真の～」という意味も持ちえたが（強調の ár）、それに押されて衰え、通り一遍の観察者の目を逃れる程度にしか用いられなくなったのではなからうか。つまり、人類が 1 を発見するに至った過程はいろいろあったであろうが、Pre-Ainu に関する考察からその一つの過程が多少とも浮かび出てきたのではなからうか。

最後に、つぎのような推察は決して不合理とはいえないであろう。もっとも早い時期のものとして、数詞を持たない言語というのがまず考えられる。それより進んだ段階として、2 あるいは 2 と 3 を示す数詞は存在するが 1 を示す数詞を欠いているような言語はありはすまいか（Pre-Ainu 期のうち比較的早い時期のアイヌ語はそうだったのではなからうか）。

また、1 を示す数詞があるなら 2 を示す数詞があるはずであり、2 を示す数詞がないのに 1 を示す数詞があるような言語は存在しないのではなからうか。このような implicational universal を見いだすことはできないのであろうか。あるものが一つあるとする。その事態そのものの認識能力は人類普遍であり民族差はないが、そこに 1 という数の概念を投影できるか否か、また、そのような概念が言語化されているか否かはまた別の問題である。

さらに、ある言語に我々の 2 と 3 を示す数詞に該当する形式があるといつて、その民族にラッセルのいう「自然数の系列」が成立しているとは限らない、と考えるべきである。

識者の教示を待ちたい。

参考文献

- Batchelor (1938) *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami.
- Brugmann, Karl (1904) *Kurze Vergleichende Grammatik der Indogermanischen Sprachen*. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
- 知里真志保 (1936/1974) 「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』第四巻：3-197. 東京：平凡社.
- (1956/1984) 『アイヌ語地名小辞典』北海道出版企画センター.
- (遺稿) 北海道文学館所蔵 CM91.
- Dettmer (1989) *Ainu-Grammatik Teil I: Texte und Hinweise*
- 服部四郎 (1964) 『アイヌ語方言辞典』 東京：岩波書店.
- 泉井久之助 (1978) 『印欧語における数の現象』 東京：大修館書店.
- Jung, C.G. (1953) “A Psychological Approach to the Dogma of the Trinity.” *Collected Works of C.G. Jung*. 11. Pantheon Books. Translated from “Versuch zu einer psychologischen Deutung des Trinitätsdogmas.” *Symbolik des Geistes*. Zurich: Rascher. 1948.
- 河合隼雄 (1977) 『昔話の深層』 東京：福音館書店.
- 金成まつ、金田一京助 (1959) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 I』 東京：三省堂.
- (1961) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 II』 東京：三省堂.
- (1963) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 III』 東京：三省堂.
- (1964) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 IV』 東京：三省堂.
- (1965) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 V』 東京：三省堂.
- (1966) 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 VI』 東京：三省堂.
- 切替英雄 (2003) 『アイヌ神謡集辞典』 東京：大学書林.
- 金田一京助 (1923) 『アイヌ聖典』
- (1931) 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究二』 東京：東洋文庫

- (1935/1993) 「数詞から見たアイヌ民族」『金田一京助全集』第五巻：98-120. 東京：三省堂.
- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店.
- (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語 文法篇』東京：国書刊行会.
- Ore, Oystein (1948/1976) *Number theory and its history* New York: Dover Publications.
- Russell, Bertrand (1919/2002) *Introduction to Mathematical Philosophy*. New York: Routledge.
- 佐藤知己 (1995) 『「蝦夷言いろは引」の研究 解説と索引』北大言語学研究報告第8号、北海道大学文学部言語学研究室.
- 砂沢クラ (遺稿) 「先祖の実話」北海道大学文学部言語学研究室蔵
- 鷹部屋福平 (1941) 「アイヌ民族の使用したる計量の単位並に音の名称に関する研究」『北方文化研究報告』3.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館.
- Tamura, Suzuko (2000) *The Ainu language*. Tokyo: Sanseido.